

慶応義塾大学湘南藤沢学会

シンポジウム・研究ネットワークミーティング基金報告書

作成：光峰 ローズネ於洲佳(総合政策学部 4 年)

参加者：

梅垣 理朗(総合政策学部教授、政策メディア研究科委員)

光峰 ローズネ於洲佳(総合政策学部 4 年)

岩崎 麻衣子(政策メディア研究科修士課程)

Doo Itthida(政策メディア研究科修士課程)

Vu Le tao Chi(政策メディア研究科博士課程)

クイニョン赤十字 3 名

フーキャット赤十字 3 名

障害児学校先生 1 名

概要：

慶応義塾大学 SFC の学生と、梅垣理朗教授、クイニョン赤十字、障害児学校の先生とフーキャット赤十字のかたたちと障害児教育の現状評価と今後の活動方針についての確認が行われた。

テーマ 1: 障害児教育の現状と今後の方針

現状についての評価

- ① 子供の変化。学校に通い友人が出来、感情が豊かになり、前より笑顔になる。授業も楽しそうに受けている。
- ② 両親がコミュニティ内で障害児について話題にすることの抵抗が減っている。
- ③ コミュニティ全体がプロジェクトに参加する意思、サポートしたいという商店が現れる。金銭的負担が減り長期的に持続可能な活動に出来る可能性。

今後の問題点

- ① 人的資源の問題。より多くのボランティア数が必要である。現在、クイニョンで障害者の先生をしている人は、あと 3,4 年でリタイアする意思があるので、活動をひきつぐ人物が必要である。先生も一般のボランティアで構成されており、教育の仕方に不安感を抱える人がいる。元教師の動員が良いのではないかという意見が現在の先生から聞かれた。

- ② 両親が活動に耐える事。子供に変化が起きるまである程度の時間が必要である。子供が最初しぶったり、学校に行きたがらないのを、保護者は耐えて変化が起きるまで通わせたりする努力が必要である。現在、子供が教育に参加している両親は活動がつづくことを望んでいる。

テーマ 2:ベトナムへの投資について

投資と雇用、出稼ぎ

障害児を抱える母親はホーチミン市に出稼ぎに出ている。家族の生計に資する為に出ているが、実際は本人が暮らすのが精一杯であるとのこと。母親は年に数回、クイニョンに戻ってくるが仕送りは十分に出来ないとの事。ホーチミン市を歩き確認できたことは、インフォーマルセクターの規模の大きさであり、格差が見られた。大きな商業施設にはインフォーマルセクターに従事者が購入できないようなブランド品の服が売られている。その商業施設の前ではインフォーマルセクターに従事する人が靴を磨いたり、お菓子を売ったりして日々の生計を稼いでいる。タクシーの数も非常に多く、マーケット関係なく雇用を無理に作り出している場面に遭遇する。出稼ぎに来ている母親もそのような一員であり、高所得というインセンティブ、情報をもとにしたのかホーチミンという都市へと来ている。

投資と雇用の今後と農業の失業保険機能

今後、投資が引いた場合に職を失った人を吸収するのは、農業ではないか。クイニョンの農家は KUBOTA の耕作機を持っていたが利用していない。近くの住民達は共同して耕作して、ある農家の働き手が病めば、隣家が助けに入るといった互助関係にあるようだ。所有権という概念に縛られておらず、みずからの土地のみを耕し、生み出すのではなく、生産という面で協力が見られた。生産は雇用関係などに縛られぬ分、柔軟性が高く、失業率が上がった場合も吸収する受け皿となりうるのではなかろうか。

そのような点からもベトナムにおいて農業分野にマーケットの概念や政策的に自由化、競争を高めることを眺めなければならない。インフォーマルセクターの受け入れに限界が来た場合、生産関係において次にフレキシブルなのは農業だからである。